



戦争とジェンダー〈日常〉と〈非日常〉を貫く軍事主義と女性の主体性：総合討論・質疑応答

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学女性学研究センター 公開日: 2024-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内藤, 葉子, 林, 葉子, 橋本, 信子, 秋林, こずえ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/0002000266">http://hdl.handle.net/10466/0002000266</a>

# 戦争とジェンダー

〈日常〉と〈非日常〉を貫く軍事主義と女性の主体性

## 総合討論・質疑応答

内藤 葉子  
林 葉子  
橋本 信子  
秋林こずえ

### 総合討論

[内藤]

それでは第2部の総合討論と質疑応答に入りたいと思います。4人でこれまで議論してきたことも踏まえて、私のほうから3人の登壇者の方々に質問を投げ掛けてお答えいただきたいと思います。

まず、林さんに質問させていただきます。芸妓たちの組織的な戦争支援という視点から本講演会のテーマにアプローチされたご報告でした。私の研究と扱う時代が近く、林さんの報告を聞くといつも、「その問題は同時代のドイツではどうだったのか」と考えさせられます。芸妓たちの慈善演芸会活動は、中産層や上層の女性たちのそれよりも早い段階から起きていたが、20世紀に入り日露戦争の頃には皇室を頂点に序列化されて、芸妓や娼妓は劣位に置かれていくという、非常に興味深いお話だったかと思いません。

質問としては、どうして日露戦争の頃にそうした序列が起きてきたのか、国内外の政治状況とか社会状況とか、何かそういう要因もあるのでしょうか。

[林]

日清戦争と日露戦争とでは、かなり戦争の規模が違いました。それらの

戦争の戦間期に、戦争支援団体が本格的に女性団体として組織化されていき、最初は特に女性間の序列などは強く意識されずに女性たちがそれぞれ個別に戦争の報道に呼応していたのが、しだいに、社会の秩序に合わせて、戦争支援活動の中でもヒエラルキーができていったのだと考えられます。やはり、日清戦争と日露戦争の規模の違いが、大きく影響していると思います。

また、娼妓や芸妓、特に娼妓に関しましては、1900年前後の自由廃業運動の影響で、娼妓取締規則が整えられ、公娼制度の近代化が進んでいくわけですが、そういったことも、女性たちの序列化と関連しているのではないかと考えられます。

#### [内藤]

もう一つ林さんにお伺いします。林さんは日本の公娼制度について研究されておられますが、「女性の性を国家がいかに管理するのか」という点で、軍事主義と公娼制との密接な関連を明らかにされてこられました。今回のご報告は、管理の対象として性を利用・搾取される〈弱者〉というイメージではない芸妓たちの主体性に光を当てたものでした。近代国家の中心部から非常に遠いところにいる女性たちが示した主体性というものは、とても複雑なものに思います。劣等感とか罪悪感とか救済への関心とか、貧しさゆえ、自分たちが貧しいからこそ貧しい人たちを救済するという、そういう動機などが語られていたかと思います。彼女たちにとって、国家や日本というのは一体どういう存在だったのか、愛国的な行動と自分たちの置かれた状況はどのように折り合いのつけられるものだったのか、ということについてはいかがでしょうか。

#### [林]

当時の新聞記事などを見ていると、彼女たちはやはり、愛国心を発揮することによって社会の中で認められたいという気持ちが、非常に強かったと思うのです。若い時から親や周囲の大人たちにこき使われ、性的に利用され、どこにも安心して所属できないので、ダイレクトに国家に繋がろうとしたのだと思います。

彼女たちは、誰かに強制されたわけではなく、自ら進んで演芸会をしたり寄付をしたりして、その姿はとても主体的なものでした。普段差別されているからこそ、慈善活動にも戦争協力にも積極的になったわけです。けれどもそうやって芸妓や娼妓が献金をしたりすることが、一時的に「立派な行いだ」と褒められることはあっても、長期的に見れば、彼女たちのその努力は、彼女たちが本当に欲していた社会的承認や地位向上には、ほとんど結びつかずなかつたと考えられます。

### [内藤]

ありがとうございました。では続いて橋本さんにお伺いさせていただきます。橋本さんのご報告は、今のロシアとウクライナの軍事衝突という状況からも、時事的な関心の高いテーマでした。私の研究対象としているドイツは中・東欧圏やロシア圏と隣接しており、歴史的に非常に複雑な関係をもっています。中・東欧研究者の橋本さんのお話を聞くといつも、時代的・地域的なつながりから「ドイツとの関係はどのようなのだろう」と考えさせられます。

ドイツの場合、私が扱った第一次世界大戦の頃は、女性の戦争協力は銃後のものでした。それはドイツにおける家父長主義の強さのせいもあるかと思うのですが、中・東欧圏、ロシア圏における女性と軍事的なものとの距離の近さには、やはり驚かされる場所があります。早い時期からの女性兵士の存在や、バルチザンの女性の像がたくさんつくられていたことなど、「女性が武器をもって戦う」ことが深く日常のなかに入り込んでいるという印象を受けました。

これは歴史的にもそうで、ロシアは帝政期には女性の革命家が出てきますし、ソ連時代、とくに独ソ戦のときでも膨大な数の女性たちの活躍がありました。しかしこうした女性たちの活躍はジェンダー平等につながる話なのだろうか、という疑問があります。過去のロシアやソビエト連邦、今のプーチン政権がやっていることを見ても、人命や人権の軽視という、いわば悪しき伝統のようなものがこの地域にはかなりあるように思います。橋本さんのご報告にも、昨今のウクライナでは、軍事におけるジェンダー

平等を推進しているといった解釈がなされているというお話がありました。それには橋本さんもちょっと疑問を呈されていましたが、これは本当にジェンダー平等につながる話なのでしょうか。ジェンダー平等の実現に見えたとしても、人命や人権を軽視するところに本当にジェンダー平等は実現するものなのかと思いました。いかがでしょうか。

【橋本】

まったくそのように思います。私が見ている地域は、女性が戦いに参加するのが非常に多く、不自然なことではないとされているのですが、それはなぜなのかというのは、大きな問いです。共産主義や社会主義が男女平等を謳っていたというのものもあるとは思いますが、そうした思想が浸透する以前にも女性が戦闘に参加した例があったりするのです。あのあたりの地域は、攻め入れられ、攻めて、を繰り返してきたので、常に攻められる恐怖や、常に守らねばならないといった意識を持っているがゆえなのかなとも考えたりします。

実は、旧ソ連も家父長制は根強く残っていました。男女平等の建前はありつつ、男性優位な面もあったし、女性は子を産むものだという意識もものすごく強いです。今でもそれは残っています。

今のウクライナの社会も、女性の登用は進んでいるにはいますが、でもやはり女性というのは普通子を産むものだ、みたいなものはすごく強くあります。そうしたこともあって、フロアからご質問もいただいています。今回の侵攻に際しても、「女性は逃げろ、男性はとどまれ」といったようなこともあるわけです。

次に、内藤さんがコメントの後半でおっしゃった点、軍事におけるジェンダー平等を推進することは、本当にジェンダー平等につながる話なのか、ということについてですが、たとえば現にある組織に女性が入って行って、そこでその人たちが差別されるとか、ひどい扱いを受けるとか、組織を出た後にろくな保障がないといったことは是正しなくてはいけないとは思いますが、でも、軍隊という組織は他の組織とは明らかに違う性格を持っています。そこには防衛だけではなくて、どうしても攻めるということが必ずあるわけです。つまり、人を殺す、傷つけるといったことが必ず付随

する組織なわけです。そこにどんどん女性を進出させて活かすべきだというのはいかがなものだろうと思うのです。ウクライナの当事者の人たちにとっては、女性が進出するための環境整備が整ったり差別がなくなったりするのは評価できることであるというのは理解できますが、下手すると、ロシアとの戦争が事態を良くした、とまでは言わないものの、環境整備に弾みがつくというようなとらえ方が垣間見えたりして、いやそれはさすがにちょっと違うのではないかと思います。今回はロシアからの侵略を受けてのことではありますが、そもそも戦争という事態が問題なのであって、それを「環境整備のチャンス」と捉えるのは違うのではないのか、と私は考えております。

#### [内藤]

ありがとうございます。続いて、秋林さんにお尋ねします。軍事主義の問題については、秋林さんは平和主義へのアクションへとつなげるために格闘されてこられた方だと思います。戦時性暴力の問題というと、まず1990年代に、旧ユーゴスラビアの内戦やルワンダの内戦で、それから日本でも従軍慰安婦問題としてクローズアップされたことが思い起こされます。

私が報告の中で挙げた1915年のハーグ国際女性平和会議ですが、そこで出された決議が、実は、女性たちが歴史の中で初めて、兵士によって犯された暴行を糾弾したものだといわれています。90年代においても戦時性暴力は歴史の中で沈黙を強いられてきた暴力だといわれていましたが、もっと早い段階、1915年の段階で、戦時性暴力に対する非難の声が、たとえ小さな声であったとしても、公式に出されていたということは重要であると思います。

この1915年のハーグ国際女性平和会議をきっかけにつくられたのが、WILPF（女性国際平和自由連盟）という組織ですが、これは現在も続いていて、その前会長が秋林さんなのですね。軍事主義に対抗する平和主義の動き、とくに女性たちの平和主義が、20世紀の歴史を通して私たちの生きる現代にまでつながっていることを、秋林さんがここに居られるという

ことで、個人的にはとても実感しているところです。

「〈日常〉と〈非日常〉を貫く軍事主義」という副題に関連して、秋林さんのご報告では、軍隊内の性暴力に焦点をあてながら、基地をも含む軍隊と、それを支える制度や政治構造を問わなくてはならないという問題意識が非常に強く打ち出されていました。その点、女性兵士という存在は、この軍事システムの中に組み込まれた存在でもあるわけですが、今橋本さんがおっしゃられたこととも近い問題があります。軍隊内の性暴力の問題に取り組む元女性兵士たちと、軍事主義を批判し平和主義を求める女性たちの運動は、両立できるものなのかという点についてお伺いさせていただければと思います。

【秋林】

WILPFの紹介もして下さってありがとうございます。細々でもないのですが、ずっと続けている団体です。WILPFの紹介もさせていただくと、1915年は12カ国くらいで、21年には25カ国くらい、今は50カ国・地域以上に支部があり、ずっと脱軍事化とジェンダー平等を目指しています。もっとはっきりと「家長長制をぶっ壊す」というような激しい言葉を使って活動しています。そこで、近年、私が国際会長で執行部にいた頃から、今も取り組まなければならないのは、人種差別の問題ですね。ジェンダー平等だけではなくて、様々な人種の問題をどうするのかということです。特に近年アフリカの支部が増えてきているので、欧米中心の植民地支配的なフェミニズムに対しての突き上げも強くなってきたと感じています。

WILPFの紹介はそれくらいにします。では、軍隊内での性暴力の被害者と、先ほど紹介した軍事主義を許さない国際女性ネットワークのようところがどうつながれるか。それほど簡単ではないのですが、軍事主義を許さない国際女性ネットワークのアメリカ本土の女性たちは、アメリカの国内の問題、先ほどお話ししたような、誰が軍隊に行くのか、行かなければならないのか、なぜ行かなければならないのか、という問題に取り組んでいます。ネットワークには社会福祉系のソーシャルワーカーの経験がある人たちも多いんです。そういうところからのアプローチが一つは可能かと思います。軍隊に行く前の段階のリクルートをどういうところでしてい

るのかということです。例えば、リクルートが学校に行くわけです。それも自分たちの経済力では大学に行けないような地域の高校などに軍隊はリクルートに行きます。そのような問題から取り組んでいくというアプローチがあります。

それから、実際に私たちの活動に何回かサバイバーを組織している人たちが参加したりして、いろいろな議論も重ねています。難しいと思うのは、国に対してどういう意識を持っているか、ナショナリズムや愛国心です。何が愛国心なのかというような議論でなかなか折り合えなかったりします。でももっと話をしたら私たちも通じるのではないかと、活動を重ねてきてはいます。なんとかつながっていかないと、軍隊の問題をもっと構造的に考えられないのではないかとこの点において、つながりを持ち続けたいと思っています。

[内藤]

ありがとうございます。簡単ではありますが、こうした形で総合討論とさせていただきます。

## 質疑応答

[内藤]

続きまして、フロアのみなさん、オンライン参加のみなさんからいただいた質問に対して、順次お答えさせていただきます。

### 第1講演（内藤葉子「第一次世界大戦とドイツ市民女性運動」）について

[質問1]

戦争への女性の動員は、女性組織が主導して行っていたのでしょうか。日本の愛国婦人会などは、背後に男性ががつりいるのですが。

[回答：内藤]

第一次世界大戦期のドイツでは、戦時局中央本部長官のグレーナー将軍



が女性の労働動員を図るために女性労働本部を作り、そこにリユダースやツァーン＝ハルナックというBDFの指導者たちが就いて女性の動員を図っていきます。だから、女性の動員の背後に男性がいるかという点では、戦争遂行の指導的地位にいたのはやはり男性であったといえます。女性組織は戦前には政治的なイデオロギーや宗派によって多種多様でしたが、戦争期には総力戦と挙国一致体制のもとに置られました。

ただ、戦争前の帝政期から見れば、市民女性運動の統括組織であったBDFは女性たちから成る組織でした。これが右派の女性組織になると、まず男性の組織があって、その婦人部のような形で女性の組織がつくられていくので、性役割分担がしっかりとある組織であったといえるかと思えます。また労働者女性運動も社会民主党や男性中心の労働運動の一部に組み込まれていました。少なくとも、市民女性運動の担い手たちは自分たちの運動を自律的なものと捉え、フェミニスト・プログラムを目的として追求していると考えていました（これは別の視点から見れば、男性市民層中心のリベラルな政党や団体との関係が、右派や左派よりも密接ではなかったともいえるかもしれません。これについてはまた別に検討したいと思います）。その意味では、戦争期においてBDFが国民女性奉仕団をほぼ瞬時に編成しえたのは、戦前からの充実した女性運動の成果であったし、女性の動員に対する運動側の自発性・主体性の現れであったともいえます。

## 【質問2】

銃後として女性が働くようになったというのは、女性の社会進出を象徴するというよりは、働くことはあくまでも男性であって、男性に代わって家庭を守ることでとらえられていて、それが分業意識をより強固にしたのでしょうか。働くことのニュアンスが現在とは違うように感じました。

## 【回答：内藤】

もともとドイツは、当時は他の国もそうかと思いますが、性別分業意識が強い国であると思います。けれども戦争が始まると、労働可能な男性が戦地に行くので労働力不足となり、女性が家庭の中にとどまることがもはやできなくなります。女性たちも動員されて工場労働や鉄道やバスの運

転手など、それまで男性が就いていた職種に就くことで、ある意味社会進出が促されていきます。たしかに象徴になったというよりは、戦争という非日常の中で起きた経緯だったように思います。ただ、BDFの指導者たちは、基本的には、女性が専門的な職や地位に就くことを戦前からずっと求めていました。戦争がきっかけになって女性たちが工場労働に動員されるなかでも、より専門的な技能を身に付けさせるなど、職業訓練を一生懸命進めようとしています。

では、戦争が終わって男性たちがみんな帰ってきたら、女性たちはあっさり家に戻ったかということ、やはりそう簡単にはいきません。男性働き手が戦死や負傷した場合など、自身や家族の扶養が死活問題になる女性たちもたくさんいたわけです。けれども、戦争が終わって兵士たちが帰ってくると、国家も労働組合も産業界も、女性たちを解雇して職場を男性のものに戻そうとします。臨時的労働者で使われて、いらなくなったら「家に戻れ」と言われつつあった状況のなか、敗戦とともにドイツでは女性参政権が導入されることになりました。立候補したBDFの指導者たちは、女性たちの利害関心が法律のなかにしっかりと反映されることは女性たちの生存に関わることだと考え、多くの女性たちに投票にいて自分たちの権利を行使するようにと訴えています。

実際、議員となった彼女たちは、地方自治体行政のなかで官吏としての女性の地位を確実にしようと尽力しますし、男性官吏や男性教師のほうが女性官吏や女性教師よりも給料が高いことなどを批判し、同一労働同一賃金の原則を唱えています。保守的な政党からの、結婚したら女性は家庭に戻るべきだという主張と対立していました。

ただ、彼女たちの考えた専門職も福祉や教育に関わる分野であり、「母性」や「女性的特質」を盾にしての社会進出を想定していました。その意味では性別分業意識がなかったわけでは決してないのですが、基本的な方向性として、女性の社会進出を積極的に推進していたといえます。もちろん、階層や政治的イデオロギーの差異によって温度差があったので、私が焦点をあてているリベラル・デモクラシー寄りの市民女性たちの動向ということになります。

## 第2講演（林葉子「日清・日露戦争期の芸妓たちの慈善活動と戦争協力」） について

### [質問]

軍隊保護のためにつくられた遊廓と、日常的に軍事主義が浸透したこととの関係を、もう少し詳しく説明してください。

### [回答：林]

たとえば、明治・大正期の新聞を読んでいますと、たとえば、港に軍艦が着いた時に、それに乗っていた兵士が港の近くの遊廓に押し寄せていって、その娼妓たちが一挙に来た兵士の相手をしなければならなくて大変だった、というような記事が出てきます。そして、そのように遊廓へ行った兵士と娼妓や芸妓との間で、どんな会話をしたのかを報じた記事も、わりとたくさん見つかります。

先ほどは、日清戦争の号外を楽しみに読んでいた芸妓の話を少しご紹介しましたけれども、なぜそんなふうにならぬに娼妓や娼妓が戦地の状況に関心を持っていたかといえば、遊廓に兵士が客として来ることが当たり前的前提となっていたということが、その理由の一つとして挙げられます。もちろん兵士以外の男性も遊廓の客になりますけれども、兵士は主要なお客であり、戦争が始まったら娼妓や娼妓たちは、その兵士に話を合わせて、戦況について語れなければならないわけです。だから、話を合わせられる程度には知識をつけておかねばなりません。

兵士たちは、兵士として頑張っていることを応援してほしいわけですので、娼妓たちは、彼らの応援歌になるような歌詞の歌を選んで、遊廓の中で歌うようになります。中には「敵の首を取ってきてほしい」といった歌詞もあります。

そのような日々の接待の実践を通じて、遊廓の中に軍事主義が徐々に浸透していったと考えられます。

### 第3講演（橋本信子「女性兵士をめぐるイメージと実態」）について

#### [質問]

ウクライナではロシア侵攻が始まって以来、女性を避難させ男性を国内にとどめる政策がなされたように思われました。そのことと女性兵士の志願兵の存在との関係はどうなっているのでしょうか。母としての兵士という表象と、女性の国外避難政策とは矛盾しないものとして受け止められているのでしょうか。

#### [回答：橋本]

とても興味深いというか、考えねばならない、おそらくこれから丁寧に見ていくべきところだと思います。女性と子どもという、次世代を育み、担う人たちは大挙して避難し、男性は残って戦うという大きな流れは確かにありました。ですが、男性の中にも避難したい人もいたり、女性もとどまって戦うという人もいたりするなど、みんながみんな同じ考えや行動をとったわけではないようです。

今年2月のウクライナへの侵攻を私たちは突如起こったことのように感じましたが、ウクライナにおいては、もうこれは8年前から起こっていたことなのだというとらえ方もありました。全面侵攻でこそなかったですが、2014年のクリミア併合の頃からずっとロシアは分離主義者を支援するなど圧をかけてきたからです。志願兵も2022年の侵攻で突然わっと出たわけではなくて、2014年ぐらいから女性も男性も増えていきました。戦闘に参加しなくても、たとえば防衛の訓練をすとか、何かに備えるとかといったことをしてきた人もありました。そうした「準備」の時期を経て、戦うことを選ぶ人もいれば避難することを選ぶ人もいるというように、各自が選択して動いているという面にも目を向けたいと思います。それゆえ、今後また事態が変わった時に、たとえば戦った人に対して、あるいは避難した人に対して、逆の行動をとった人がどのように振る舞うのか気になるところです。ご質問ありがとうございました。

[内藤]

第4回講演の秋林さんには質問は来ておりませんので、いただいた質問は以上となります。

本日はみなさん、長時間にわたり講演会にご参加くださり、まことにありがとうございました。講師のみなさんも本当にありがとうございました。それではこれで講演会を終了させていただきます。